

第 8 回 小中一貫教育校検証部会 会議要録

開催日時	平成 26 年 12 月 3 日（水） 午前 10 時～12 時	
会 場	小中一貫教育校大泉桜学園	
出席者	委 員	酒井朗 花園主計 近藤みちよ 金子靖子 小澤久美子 玉井弘子 西村貴 富岡弘美 小川善昭 木下川肇 田頭裕 池田和彦 勝亦章行 堀田直樹 羽生慶一郎 伊藤秀樹
	その他	統括指導主事
	事務局	新しい学校づくり担当課
傍聴者	なし	
案 件	(1) 前回議事録について (2) ヒアリング（学校関係者および児童・生徒）の記録について (3) 学力調査にかかわる検証について	

- 1 開会
- 2 あいさつ

部会長

本日もぜひ活発なご議論をお願いいたします。

前回から丸々 2 カ月経ちました。今いろいろなことが大きく動いており、つい先日も、新しい学習指導要領のあり方について中教審に諮問がありました。小学校での英語の教科化や道徳の教科化などが議論になっていきます。

この小中一貫校も、法的に制度化され、正式な学校として認可されるような方向で議論が進むと思います。この部会での議論は今後の小中一貫教育校のあり方に大変参考になりますのでぜひ活発にご発言をお願いしたいと思います。

- 3 案件

- (1) 前回議事録について

部会長

最初に、要点録について、事務局から説明をお願いいたします。

事務局

（説明）

部会長

よろしいですね。

- (2) ヒアリング（学校関係者および児童・生徒）記録について

部会長

案件の (2) ヒアリング（学校関係者および児童・生徒）記録について、事務局から説明を

お願いします。

事務局

(説明)

部会長

ヒアリングの実施にあたりましては、ご協力いただき本当にありがとうございます。

地域の方々、保護者の方々からのご意見、児童・生徒は5年生から9年生の児童生徒会の役員の子どもたちの意見が掲載されています。

例えば50分授業については、いろいろな意見がありました。学年により過去形で書いてある子と現在形で書いてある子がいますが、これでだいたい学年がわかるのではないかと思います。

資料1と資料2を見て、ご感想とかご質問とかありましたらお願いいたします。

委員

50分授業について、面倒だったという言葉がありますが、これはどういうことを具体的に言っていたのですか。

事務局

これは、開校時に西校舎に教室を移して50分授業をスタートしたことを経験した生徒の感想です。授業時間が45分から50分になったということで、その学校生活や学習のリズムが変わったことから、長いなとか面倒だな、負担感があるなという感想をもったということです。

部会長

前の小学校の様子を知っていて授業時間が変わった子と、この学校はこういう学校だということで学んでいる子とでは、学年によってやはり意識が大分違うと思いますね。先ほど、面倒だったというのは8年生、9年生だと思いますが、そういう子たちの感想と、こういう学校なのだということで慣れている今の5年生、6年生とでは、やはりちょっと感じ方が違うのかなと思います。

ほかの学校の様子と比べれば、50分というのは少し長いのかなと思う子もいるかもしれませんね。

委員

小学校でも45分の授業が5分延びて50分になってしまうことが、たまにあります。授業の時間が10分あると次の授業の準備の余裕ができていいのかなと思います、私の小学校でもやりたいのですが、子どもも中休みを大事にしているので、ちょっとできないのです。

ここには、中休みがなくなったということは書いてありませんが、それに関する意見はなかったのですか。

事務局

グループの面談でしたので、そのような声もあったかと思いますが、記録としてはきちっとは残っておりません。

その、面倒に感じたというのは、恐らくそういう面も含んだ発言だったということです。

部会長

この中には出てこないですね。確かに休み時間が短くなってしまふ。

委員

小学生にとってはかなり大事なことはないかなと、ちょっと気になるところです。

部会長

休み時間が短いと、子どもたちの動きも随分ほかの小学校とは違うのですか。

委員

20分の中休みの存在を全く否定するものではありませんが、子どもたちは結果的には順応していくのだと思います。本校の場合は東校舎と西校舎に分かれています。東校舎、西校舎といった区切りがないと、もうちょっと引きずるものがあるのかなと思うのですが、4年生が東校舎最高学年で、4年生が終わったら「虹を渡る式」という式を経て5年生になり、西校舎で学ぶことになるということで、子どもたちはリセットして入ってくるので、結果的に、もうそれは慣れていきます。

また、前の時間に例えば体育であるとか教室を移動するとか、いろいろな実技教科で後片付けなども含めたときには、10分休みのほうが余裕を持って次の時間に臨め、授業にスムーズに入っていけるということを子どもたちは理解していると、私は受けとめています。

委員

休み時間の問題は、子どもにとってはうまく処理できたというか、前向きに捉えられているということですね。

委員

もう1つは、100%ではないのですが、部活動に入部することで、身体を動かすことがある程度ケアされているということです。

それでもまだ物足りないという子は、朝ちょっと早めに来て校庭で遊んでいます。学校としては、特段推奨しているわけではありませんが、朝早いから遊ぶなど言わずに遊ばせています。

委員

若干、ネガティブな発言が、学校関係者からあったことがちょっと気になっています。例えば、「開校当時の中学校の先生は結構ぼやいていた」「特に運動会、小中一貫になって良かったという話は聞かない」「先生もつい言うってしまうのだと思う」という発言が学校関係者の中から聞かれており、ちょっと残念な感じがします。「良かったという話はない」という部分についてもう少し事務局のほうでお聞きになっているようなら、教えていただけると運営上の参考になると思います。

事務局

今の部分は、後ほど取り上げることになるかと思います。ヒアリングについては、全体の流れがあります。今回の資料では、ひと言ひと言を分類してしまっているの、流れが見えにくくなっています。今はこうであるという部分が分かれて出ていますので、トータルしてお読みいただくような術を考えなければいけないと思いました。

特に、学校内の指導の様子、学校の仕組みとか、学校の中のことについては、学校関係者の皆さん、地域の皆さんはなかなか知るチャンスがありません。例えば学校行事で来校されてもある意味、切り取った一部分だけをご覧になるので、こういう観点でのご発言は、やはり少ないのかなと思っています。ですから、小中一貫教育が良いのか、小学校と中学校のままで良いのかよくわからないというのは、正直な感想かなと受けとめています。

そのあたりを教育委員会としてはさらに発信していかなければいけないと思っています。また、こういう検証の成果もお伝えしていかなければいけないと感じているところです。

部会長

話の流れのようなものがあつたと思うのですが、こういう形式に分かれると、意見を切り取ってしまうので、見えにくくなっているということがあります。そこを考慮しながら発信していかないと、言葉だけが何となく一人歩きしてしまうことになります。その辺は少し慎重にしないといけないですね。

委員

まとめの方法に課題があるとしても、やはりこういった意見があるということは真摯に受けとめたいと思います。特に学校関係者の方から聞こえてくるといことは、逆にこういうところをもう少し議論の対象にしていくほうが、この会の意義があるのかなと思いました。

部会長

次の、小学校から中学校への進学する際の円滑な移行に関連する質問についてです。
事務局から説明をお願いします。

事務局

(説明)

部会長

児童・生徒については、開校前に関する発言が多いのですが、開校前後で変わったことや、7年生になったときにどうだったかということが一番大事です。その移行の部分について、子どもたちの感想は何かありませんか。

事務局

この2番の項目に関連した内容では、やはり東校舎から西校舎に替わる5年生の段階での変化が、非常に大きく出ています。

ヒアリングした対象児童・生徒が5年生以上ということもあって、その辺の意見が多くなっていました。逆に、7年生という部分を、子どもたち自身も大きな節目、区切りと感じづらくなっているのではないかと感じました。それが4番目の「立場が曖昧だと感じる」という言葉

に繋がっていると思っています。

部会長

子どもたちに聞いても、あまりそのことが話題にならないということですね。小学校と中学校との間では、中学校1年生に入ったときの感想はたくさん出てくると思うのですが、大泉桜学園では、むしろ西校舎に行ったときの感想が出てきています。4年生から5年生への移行というのがかなり印象として残っているわけですね。

事務局

7年生には防災リーダーとしての役割や、飯ごう炊さんの活動といった面もありますので、3番以降の中には滲み出ています。

部会長

そういうところにも出てくるということをお含みおきの上、ご意見をいただければと思います。

委員

この調査では、児童・生徒にヒアリングした段差について、こういう意見が出てくるのは当然だと思います。一方で、本校には大泉学園桜小学校の卒業生以外のお子さんも少なからず在籍しているので、そのお子さんにとって、7年生から入学することは、きわめて大きな段差だろうと思います。しかし、小中一貫教育校の成果として、本校では非常に開かれた人間関係ができていますので、おおむね大きな段差を意識して本校に入学してくるお子さんも、そういった人間関係の中に比較的スムーズに入っていけるのではないかと思います。そこら辺のことはもう少しヒアリングしたほうがいいかなと思います。あるいは本校でも子どもたちに意識調査をしているので、それが使えるかもしれません。

部会長

他校から7年生に入ってきた子どもたちが比較的適応がいいことは、アンケートでは出ていたと思います。

委員

子どもたちの意識の中で、5年生というのは1つの区切りになっているのですが、制度上、小学校6年生で卒業証書授与式を執り行うということがあるわけです。これは非常に大きなことです。小学校の全課程を修了したことを証するという内容のものを子どもが受け取るわけですが、子どもの意識の中で違和感があるといった発言は聞けるのでしょうか。

事務局

後のほうにも出てきますが、6年生でいったん卒業、そしてプレ7年生としてその後も登校し、7年生を迎えるというあたりについては、ある種の戸惑いはあるようです。

部会長

先ほどもちょっと話題になりました、3番の、幅広い年齢集団による活動を通じて、豊かな人間性や社会性の育成ができるかというテーマに移ります。縦割りの活動などに関連するものです。

最初に事務局から説明をお願いします。

事務局

(説明)

部会長

資料2のほうは大分長いので、目を通すのが難しいのですが、お気づきの点があればお願いします。

ちょっとだけ補足しますと、の7ページの一番下に、地域社会と連携した学校づくりというところがあります。こういう観点はこれまでの小中一貫の中ではありませんでした。

町会との繋がりが、小中一貫になると1つになるので非常に良くなるということは、今回調査してわかったことです。地域との繋がりは小中一貫になることでより緊密になるのだということがすごくよくわかりました。

委員

6ページの、緊張感とか言葉づかいのところですが、子どもは確かに敬語を上下間で使っていません。中学校の先輩にそんな言葉遣いでいいのかとか、名前を呼び捨てにしているのかという話をすると、ほとんど「別に怒られないもん」とか、「みんなが言っているから」という返事です。そういう意味では仲がいいのか、学校の雰囲気なのか、全てがそういう状況になっているのですが、上級生が果たしてそれを良しと思っているかは、確かにそこにあるとおりかなあということです。それが外に出たときに、そういう言葉がちゃんと使えているかという、それなりに敬語は使っていますので、あまり心配することもないのかなという気はしています。逆に、学校側が先輩に対してタメ口はだめだという指導を行っているのかどうかお聞きしたいところですが、むしろそういうことよりも、仲良くうまくやっていると、私は感じています。

委員

身なり、服装、言葉遣いの3つの方針の指導の徹底を、平日頃から図るようにしています。いわゆるタメ口も、子どもたちは悪気があって使っているわけではありません。フレンドリーな関係をつくっているんで、あまり目くじらを立てると逆に人間関係がギクシャクしてきます。よほどひどい言葉遣いでない限りはあまり注意しないのが現状ですし、社会的に出てくる影響とか、いろいろなメディアからの影響を考えると注意しきれません。人権上使ってはいけない言葉や単語については、きちっと教えていくよう学校としては相当こだわりを持っていますが、実際のところ、それがそのまますぐ効果を発揮するということにはなっていないなと思いました。

人権上使ってはいけない言葉を丁寧に具体的に教えることも必要です。なぜならば、それがいじめの温床につながっていくわけですから。そこに気づかせるということも大切です。でもすぐには激変的に効果を発揮するというわけにはいかないですね。

部会長

5年生から9年生までが1つの部活の集団なので、その中であまりガチガチに上下ということ意識させると、それはそれで苦しいのかなとも思います。むしろ和やかに、先輩と後輩の関係ができていくんじゃないかなと見ました。

委員

私もそう思います。

委員

補足ですが、例えば1年生と9年生の2学年で、交流しながら給食をランチルームで食べる時は、敬語とは言わないまでも、大変丁寧な言葉遣いで「お兄さんは何の部活動に入っているんですか」「はい」なんて言っています。要するにTPOをわかまえている場面は、この学校の中では比較的多くあるのではないかと思います。部活動の中であまり言葉遣いを強く指導し過ぎると、今度は先生たちには廊下ですれ違っても会釈しないのに、10m先、50m先の先輩の姿が見えたら、米つきバツみたいにくペコなどという行き過ぎた礼儀というのが出てくると思います。本校にはありませんが、そういう行き過ぎたマイナスの波及効果というのも決してないわけではないので、バランスというのが大事なかなと思います。

委員

資料1の2ページ目の真ん中に「6年、9年生合同の卒業式は、中学校の卒業式のイメージに近いので、分けて行うことを希望する」と、卒業式のこと書いてあります。関係小学校の卒業式にも何回も行かせていただいておりますが、小学校の卒業式と中学校の卒業式はかなり違います。中学校においては、義務教育最後で、最後の別れの日でもあり、いわゆる感謝する式が多いのですが、小学校は違います。一貫校ということで、一緒にできるわけですが、ここには分けて行うことを希望するということ書いてあります。中学校の立場からすると「君たち、これからそれぞれの進路に向けて頑張りなさい」というようなメッセージを校長として言うのですが、小学校6年生には、なかなかそういう言葉が言いづらいので、できれば別々に行った方がいいのかなと思います。

事務局

幾つかの意見をまとめておりますので、このまとめのところは分けて考えなければいけないかと思いますが、6年生については、中学校の日程で卒業式が行われて、その後、終業式まで3、4日、登校する日があり、卒業式の翌日が平日であれば、普通に登校して、プレ7年生として中学校生活に向けた学習生活を行うという仕組みになっています。その部分の気持ちですね。これは教職員の意見にもありましたが、卒業式が終わった翌日に、また「おはよう」という感じがどうなのだろうという部分もあります。

ほかの中学校に進学する児童とのお別れのタイミングとしても、中学校の日程に合わせた卒業式のときには、まだお別れする気持ちはそんなに高まっていないというのもあると思います。

一方、9年生にとっては、中学校の卒業式は義務教育最後で、その後進路がさまざま分かれていくので、やはり別れというイメージがあります。保護者等の立場からしても、やはりこ

で1つ大きな節目を迎えるのだという思いを、どうその学校行事と繋げていくかというところが大きなテーマなのかなと思います。

学校運営上の課題も検討した結果、今の姿になっているのだと思いますが、この検証の中でご意見をいただければありがたいと思います。

委員

本校では、便宜上、小学部とか中学部という区分けも使っていますが、極力小学生とか中学生とかという言い方はしていません。練馬区教育委員会の基本方針に基づいて、4、3、2の1期、2期、3期の区切りで、成長の節目ということに着目して教育課程を行っています。したがって、6年生のところで卒業式を行う必要はないのではないかという意見は少なからずあります。一方では、小学校6年間の教育課程が修了したことを卒業証書を授与することでやらなければいけないというのは法に定められていますので、校長としてそれをきちっとやる必要があります。それから、本校以外の中学校へ進学するお子さんたちも含めて、6年生に対する敬意を表するというで、そういう儀式があっても構わないというふうに思い、実施しています。

聞くところによれば、今度は国の法律も改正されて、小中一貫教育校なканずく施設一体型の小中一貫教育学校が法整備されると、6年生で卒業証書授与式を行う意味は全く見い出せなくなるということも考えられます。

部会長

法制的にはなくなります。

委員

とは言うものの、私は「初めに子供ありき」ということを学校経営上標榜していますから、子供の視点から、6年生に卒業証書を渡すことに何ら違和感はないし、1つの学校で大きな行事、特に儀式的行事を複数回実施するという事は考えにくいので、一緒にやっています。そのことによるメリットとデメリットがあるのも承知していますが、今申し上げたような理念に基づいて、一緒に行っています。

4、3、2の成長の区分もありますが、6年生はやはり世間一般では小学校の最高学年として位置付けられているので、そういう成長の区分で刺激を受けることが少なくなっていくなら別ですが、多い分には、子どもにとってはマイナスにはならないと思っています。

ただ、どちらかといえば中学校のバージョンに合っているのではないが、もうちょっと小学校的なものがあった方がいいのではないかという意見があるのは致し方ありません。いろいろなところで改善の必要はあるかなと思いますが、二兎を追ってやるわけにはいかないと考えています。運動会なども同様です。

委員

長男の卒業式が、大泉桜学園が開校して初めての卒業式でした。私自身、子どもの卒業式に出るのが初めてで、ほかを知らないのですが、ちょっと寂しいなというイメージがありました。9年生がメインというのもありましたし、うちの子は他の中学校に進学する予定でしたので、それもあり、寂しいなという印象はありました。しかし、卒業式を控えた6年生の娘がいます

が、校長先生が今おっしゃったお話を、以前聞きまして、そういう考え方であるなら、それは仕方がないと思っています。ただ、6年生の娘が長男とちょっと違うのは、4年生のときに東校舎から西校舎に移るといふ1つ儀式があったことです。

「虹を渡ろう会」といふ儀式で、廊下を挟んで東校舎から西校舎へ渡るといふ意味なのですが、それがすごく盛大な式でした。私は出るのが初めてだったので、普通に見て終わるのだと思っていたら、子どもたちが得意なものをそれぞれ発表して、これから私たちは西校舎に行つてどんなことを考えたいかとか、そういったことを発表する、子どもが中心の卒業式のようなものを見せていただきました。親としては、ああ、こういうものがあれば、子どもの気持ちも6年生から7年生になるときに、あまりそこで切れるといふ感覚ではなくなるのだろうなといふ印象でした。

6年生は卒業式を前に何かあるのかなと思つたら、6年生がクラブ活動では部長を務めていますので、その部長を中心に発表をするそうです。それも楽しみにして、それで何となく親としての気持ちも腑に落ちる気がします。最初の1年目はすごく寂しい気持ちはありましたが、年を追っていくごとに、子どもも慣れていきますし、親も何となく慣れていき、そういうものであるといふ納得がいくようになります。学校関係者の方も、最初のうちはいろいろと意見があつても何となく慣れていきます。子どもの適応能力は高いので、この学校はこういう学校なんだといふことに大人よりも早く慣れていきます。この学校のことは子どもが一番よく知っているといふか、認めていると思います。まさに子どもありきで、親が親の気持ちだけでどうこう言えないと思います。

部会長

4、3、2といふ独自のシステムを作っていく中で、それをどうやって運営していくのかについては、学校なりの方針の中で運営されているといふことだと思います。

次に移らせていただきます。事務局から説明をお願いします。

事務局

(説明)

部会長

小学校の先生方と中学校の先生方との協力関係といふところで、ここは非常に短いところですが、何かご意見はありますか。

委員

練馬区教育委員会で大泉桜学園を小中一貫教育校に指定されたときに、いろいろな条件を考えた上で指定されたと思いますが、教育委員会としてどういふふうにか小中一貫校としての条件を考えられて、それが現状としてうまくいったのかといふことの検証も、とても重要な点ではないかと思っています。

部会長

どういふ学校をこの小中一貫校にするのかといふところですね。こういうところではなかなか出て来ないので、大変重要だと思います。

委員

小中一貫教育校の設置にあたっては、基本方針をつくって検討しています。施設の形態や、これまでの教育活動の状況などを踏まえながら、幾つかの学校の組み合わせがあるだろうということで検討されました。その中で、ここの学校は敷地が隣接していたという点も結構大きな要素であったのかなと思っているところです。4年生の成長を促すような教育活動などにも繋がられている部分や、職員室の中でも教員が一体となってこの子どもたちを見られる体制になっているといったようなところにも繋がっている部分もありますので、施設一体型として整備してきたということについては、かなり評価ができるのではないかなと思っているところです。

部会長

ここは今後の最終的な報告書作成の観点としても、非常に重要な点だと思います。

委員

施設一体型では、その条件の中にはやはり児童・生徒の数があると思います。

本校では、異学年交流の機会をとにかく増やしています。そういう点では、この数だからできるという学校行事がほとんどです。

例えば、運動会で50m走とか80m走を行っていますが、全員走らせるわけですから、これ以上子どもの数が増えるとレース数が増え、時間が伸びます。

そうすると、1年生や2年生の体力も配慮しなくてはなりません。子どもの数が増えて運動会が伸び、4時、5時に終わるなんていうことは絶対許されないという点で、子どもの数というのは、実は非常に重要な要素であると思います。

同じように、異学年と給食を食べるときにも、これ以上学級数が多くなってくると、全てのクラスで回していけなくなってしまいます。隣の大泉特別支援学校と学年ごとに交流していますが、子どもの数が1学年で100人だ200人だとなってくると、相互に行ったり来たりするというのが、非常にやりにくくなってきます。現在の子どもの数を基に教育課程を組んでいるので、もっと多くなってくると、運動会を小学校と中学校で別々な日にやらないと、子どもの出番は少なくなるし、時間もかかるしということになります。そういうことを踏まえると、児童・生徒の数の問題は非常に大きいと受けとめています。

教員も1つの職員室の中で打ち合わせをして、いろいろと子どものための教育活動を考えていますが、子どもの数が増えて教員の数も増えると、1つの職員室の中で打ち合わせをやるといっても、マイクを使ってやらなければならないようなことになってしまいます。現在は、校内の研究組織を教科別にグルーピングしているのですが、そういう教員同士の相互交流もやりやすい人数だと思っています。それが教員のモチベーションとか、これまでの既成概念にとられない教育や、新しい考え方で子どもを見つめるエネルギーの源泉になっていると思っています。

委員

皆さんにいただいているご意見などを踏まえながら、今後、教育委員会としてどういうふうに一貫教育校を進めていくか考えていかなければいけないと思っています。そのときに、学校の規模も、考えなければならない要素の1つにはなるだろうと思っています。

一方で、区内にはさまざまな学校の組み合わせが考えられますので、その規模に応じた一貫教育校の在り方も考えられるのかなと思っています。小規模な組み合わせもあるでしょうし、ある程度大きな組み合わせも考えていく必要があるかもしれません。そういった中で行える、あるいは効果が得られる教育活動とはどういうものだろうということも考えていく必要があると思っています。

部会長

児童・生徒数が変わると、運営は全然違ってきます。運動会1つでも、どのぐらいの時間がかかるのかという点が随分変わります。大きいところは1,000人を超える、1,200人ぐらいの学校もかなりあって、そこまで行くと、全然運営の仕方が変わってきます。大泉桜学園は今の人数だからできるということもあります。逆に言えば、今の形の中でできることはどういう教育効果を持っているのかについて検証することなのではないかと思います。児童・生徒の数という点は非常に重要なので、今後、少し考えていきたいと思っています。

続きまして次の5番の、地域社会と連携した特色ある学校づくりについて、事務局から説明をお願いします。

事務局

(説明)

部会長

何かご感想、ご意見がございましたら、お願いいたします。

避難拠点のことが書いてあるのですが、避難拠点と学校との連携がスムーズになったというのは、意味がわからないところがあるのですが。

事務局

一貫教育校になる前は、小学校と中学校、それぞれ別々の組織として避難拠点連絡会が組織されていました。そこに町会の皆さんにもご協力いただくことになっていたので、一貫教育校になってこの2つの連絡会が一本化され、学校の担当者と連絡会との連絡窓口が1つになったということが大きいということです。

委員

練馬区では、広域避難広場のほかに、避難拠点として各小中学校を指定しています。小中学校が隣接していても、小学校や中学校ごとに避難拠点運営連絡会を設置しています。避難してくる方は地域の方々ですので、このように接していると、どちらの学校に行ったらいいか迷ったり、町会やPTAなどを中心に行っている連絡会の役員となられる方も、特に町会の方々と同じ地域にある学校だと、複数の連絡会に出席をしなければいけなかったりというような状況もありました。それが一貫校として学校が1つに統合されたことによって、連絡会も統合され、地域の皆さんをどのように受け入れていくかという検討もうまくいくようになり、学校との関係も一本化されたということです。

部会長

生徒のほうも防災リーダーという形で7年生が地域の方と関わる機会がしっかり設けられているので、そういう意味では、この地域との連携が非常に密になっているなと思いました。

ほかに、いかがでしょうか。では、次は6番ですね。

施設整備における効果と課題ということで、ここはその学校の設置上、非常に重要なところなのですが、まず、事務局から説明をお願いいたします。

事務局

(説明)

部会長

施設のところで、階段の高さも違って、という意見もありますがおもしろいですね。教室移動が増えたというのはどういうことですか。

事務局

5・6年生が西校舎に教室が移ったのですが、理科室・音楽室などの特別教室、教材や教具などの学習環境が、5・6年生の学習を行うにあたっては、東校舎の教室のほうが適しているのです。体育館もプールもそうです。そのため、東校舎への移動が多くなっているということですが、資料1の冒頭にありますように、50分授業で10分の休み時間という時程になっているので、子どもたちの受けとめは決して否定的なものではありませんでした。

部会長

ここは元からあった小中学校の校舎をくっつけてつくっていますので、小学校用の特別教室が東校舎のほうにあって、それで5年生、6年生はそちらのほうに移動するということですね。

次に行きましょう。

7番の、小中一貫の課題を解決し、推進するための先導的な役割です。通学区域と学校選択制とか、教育委員会の役割、かなり幅広くなっていますが、事務局から説明をお願いします。

事務局

(説明)

部会長

その他ということで、いろいろな側面の感想、意見が載っています。何かご感想いかがでしょうか。

部活動が少ないのは規模の問題があります。今は小中一貫になったことで生徒数が増えていますので、少しずつ数も増やすことができるわけですね。

委員

今、娘が6年生なので、まさにこの課題に直面しました。大泉桜学園を薦めましたが、娘は自分のやってきたスポーツをやりたいということで、ほかの学校を選択肢に挙げてきました。でも、遠くへ行かなくてもいいではないということで決着しました。

小中一貫で9年間を推奨するこの学校の6年生でも、中学校選択制の課題が出てくるので、

その点では非常に矛盾があると思います。本来なら、大泉桜学園に入ったのだから9年生で卒業するまでいなさいということと、中学校選択制があるということについて、教育委員会としての方向性がどうなのか一回聞いてみたいと思っていました。

先ほど、設置にあたって、敷地上の問題というお話がありましたが、子どもは大泉桜学園で実験台になっているわけではありません。この学校で生活し、学んでいるわけです。校長先生の経営が良いので、今うまく回っていると思いますが、教育委員会として本当に目指すべき方向性がどういうことなのか、この部会に出ている、いまひとつ方向がよく見えません。どの方向に向かって私たちは発言していいのか、保護者とする、子どもたちはここでオンタイム生活をして勉強をしているわけです。どういう道筋をつけてあげるべきなのか、親として非常に悩むところです。私たちはたまたまこういう会議に参加しているので考える機会がありますが、この会議の議論を胸を張って友人などにあまり話せません。人数の問題とかいろいろありますが、もう少し何を指してこの会議をやっているのか、練馬区教育委員会は小中一貫に対してどういう方向性で、どんどん増やしていく方向なのかお聞きしたいということです。

校長先生がされていることは、今一番いい方向で動いていると思っています。大泉桜学園に愛着を持っている人は当然残りたいと思っていますが、先ほど申したとおり、どうしても子どものやりたいことがあるとなったときには、中学校選択制を使って、ほかの中学校へ行かざるを得ないというお子様も多く出てきます。この点は6年生を必ず悩ませる矛盾であるということをご指摘しておきたいと思います。

部会長

すごく大事な点ですね。

委員

教育委員会としては、小中一貫教育については、さまざまな形があると思っています。大泉桜学園のように、施設一体型の小中一貫教育というやり方もありますし、施設は別々であっても、一貫教育を進めるという考え方もあります。大泉桜学園においても、小学校の通学区域と中学校の通学区域とが異なっています。区内のほかの地域においては、より複雑な状況もあります。

教育委員会として小中一貫教育を進めることで、さまざまな効果があると思って進めてきています。大泉桜学園は施設が一体であるがゆえに、その効果がより顕在化しているものもあります。一方で、施設が離れている学校で取り組んでいる中でも、同様に、あるいは別な形で効果の現れているものもあります。区としては、小中一貫教育はさまざまな形があると思っています。施設一体型で更に整備をしていくという場合もあるでしょうし、そうでなくて、施設が離れていても一貫教育を進めていくという場合もあります。まず、施設の形態とは別に、区内全域で、小学校から中学校9年間を見通した教育活動が行われていくようにしていきたいと思っています。

一方で、中学校の選択制については、中学校に進む段階で一定の希望を叶えられる形を考えていきたいということです。通学区域が複雑に絡まり合っているという状況の中で、例えば、友だちと一緒に中学校に入学したいお子さんがいれば、そういったことの配慮もやはり一定必要でしょう。部活動について、指定されている学校ではなかなか希望する部活動に加入できない場合には、ほかの学校を希望したいというお子さんもいると思います。そういった中で、選択

制度を設けているということです。

ただそれによって、学校の規模に著しく影響を及ぼしてしまうようであると、それはやはり教育活動としていかなものかという部分もありますので、昨年になりますが、中学校選択制度の検証委員会を設けて、今後の中学校選択制度をどうしていこうか検討していただきました。今年度は検討委員会の答申を踏まえて、課題を解決するためにどうしていったらいいかということ、具体的に教育委員会で検討を進めています。

今年度の選択制度については、従前そのまま実施しましたが、来年度以降は、一部修正を図りながら進めていくことになると思っています。

部会長

ご発言にこの検証委員会のこともありました。この委員会で行う検証の意義は、こういう新しい取組がどういう教育効果を持っているのか、あるいは運営面でどういう課題があり、それにどう対応していかなければいけないのかということをはっきりと明らかにすることにあると思います。

私は、この学校での取り組みをより良くしていくというか、ここでの実践を価値づけていくという言い方をよくするのですが、どういう意味があるのか、教育的に意味があるのかということがなかなか見えてこない部分があると思います。こうやっているデータを出してくることで初めて見えてくるところ、例えばアンケートを並べてみることで、子どもたちが確かに非常に滑らかに適応していることや、子どもたちにとっても、地域の皆様にとっても、こうした一体型の学校が意味があるということ自信を持って発信し、この実践が今後もこういう形でますます発展できるようにするにはどうしたら良いか考えたいと思います。

そういう方向で最終的な報告書も、この実践がいかに教育的に意味のあるものなのか、価値のあるものなのか、この学校の実践の価値をしっかり押さえて検証していきたいと考えています。

最終のまとめにも関わる大変大事なことをご指摘いただきました。ありがとうございます。

委員

選択制度と併せて、部活動の課題の話があったので、こういうヒアリングではあまり出て来ない部活動の課題や考え方を教員の立場から申し上げたいと思います。そもそも部活動は中学校教育の大きな特色で、子どもと保護者の期待は大変大きいわけです。ですから小中一貫教育校であっても、部活動に対してが熱心でないと評価されないわけです。

逆に言うと、ほかの中学校よりもいろいろな苦勞が必要になってきます。例えば本校を立ち上げる前の準備期間中に子どもの数が少ないこともあって、教員の定数が減って、部活動が成立しなくなるという状況の中で、魔法のような手を考えました。兼部を認め、1つではなく複数の部活動に入ってもいいことにしたのです。新しい部活動をつくって、そこに入ってもいいことにしました。前々から入っている部活動があっても、2番手、3番手の部活動を設立して、そこへの兼部を認めていく、教員も顧問を兼部する、そうすることによって子どものニーズに応えていきました。教員は勤務時間が終わった夜の5時、6時、あるいは土日、祝日も返上で労をいとわずやってくれています。そういう形で、学校自体が変わっていくという姿を地域や保護者に伝えていかなければいけないのです。こうした努力の後に新しく開校して、部活動を充実させてきました。

そうしていく中で、いくつかの課題が見えてきました。先ほどの中学校の選択制度という問

題にも関連しますが、本校では5年生6年生から部活動に入部可能にしています。その際、物理的な面で課題となってくるのは、例えば球技1つでも、5年生6年生だとボールの大きさとか重さとかが違うということです。つまり同じ部活動の中で規格、基準が違う競技を行うということは、子どもに対する安全管理上の課題が出てくるということです。練習体系を分けて別メニューを組まなければいけないとか、現実にはそういう苦労が出てきます。

次に大きな問題は、先ほどおっしゃったように、6年生で一回リセットされるので、5年生から同じように部活動で指導してきて主力メンバーとしての成長が期待される7年生、8年生が、いろいろな事情で他校に行かざるを得ないということがあることです。そうすると、一番がっかりするのは顧問です。一般の中学校であれば、中1で、前段階のことはわからないで入ってくるわけですからそういう苦労はないのですが、小中一貫教育校の部活動の顧問には、実はあまり言われませんが、そういう精神的な気苦労があるのです。私はそれを日々強く感じています。検証委員会ですから、そういう声が上がりにくいけれども実はあるのだということ、ご承知おきいただきたいと思います。

ただし、誤解してほしくないのは、だから部活動顧問をやらないというのではなくて、そういう課題もあるけれど、さらに前向きに取り組んでいきたいという教員たちがいるということです。小学校籍の教員も、自分がかつて経験した部活動だからお手伝いができればという形で数多くが顧問として登録し、引率もやってくれたりしています。小中一貫にもいろいろなタイプがありますが、本校のように5年生からできますという学校では、デメリットとは言いませんが、実施上の苦労も相応にあるということ記録に残していただきたいと思います。

委員

中学校選択制は部活選択制だと保護者の中ではよく言われます。難しいことはよく承知していますが、学校に残りたいけれど他にやりたいスポーツがある、顧問の先生はいるけれどチームで試合ができないということで、皆さん非常に悩まれます。たとえば、部活選択制あるいは部活連動型の学校連携というようなことがあると、子どもたちも大泉桜学園に残りつつ、他校との交流も持てるということにも繋がるかなと思いました。

部会長

全体的な仕組みを変えていかないと、大泉桜学園だけでは解決できないことが多いということですね。

委員

部活動の学校連携についてですが、部員数が足りない学校が他校と合同チームをつくることは、中体連でも認めています。本校でも取り組んでいる実績もあります。中体連が全く門前払いをしているわけではないということを念のため補足させていただきます。

(3) 学力調査にかかわる検証について

部会長

非常に大事なポイントについて幾つもお意見をいただきました。最後の、学力調査にかかわる検証について、事務局から説明をお願いします。

事務局

(説明)

部会長

いろいろな資料が出ています。お気づきの点、あるいはご質問はありますか。

事務局

少し補足させていただきます。

意識調査のところで、9年生の数値が低めに出るのは、全国的にも同様な傾向があります。発達段階の特徴ということもあるかと思います。一方で、大泉桜学園の特徴としても9年生、上級生に向けての意識の部分をどう解釈していくのかということは、1つのテーマかなと思っています。9年間を見通した教育活動の中で、これをどう考えていくのかというのがポイントになると思います。

学習面での成果が出るためには、一定程度の教育活動の積み重ねが大事ですので、小中一貫教育校として開校して4年間で急激に変わるということもなかなか難しいのではないかと思います。事務局で資料を用意した印象でございます。

関連したご意見がいただければと思っております。

部会長

いろいろ数字がたくさん出てきますので読みにくいのですが、意識調査のほうは6年生、9年生を対象にとっています。当たり前ですが、その年度が違えば違う集団になります。全体的な傾向として、去年の9年生では、勉強に対する意識など、ちょっとネガティブなところが多かったのですが、例えば「学校に行くのは楽しいですか」という設問では、資料4と資料3にあるように、今年の9年生のほうがぐんと上がっています。そういう学年のカラーみたいなものがありまして、全体としてどういう傾向があるとは一概に言いにくい数値です。

委員

特に気になったのが、資料3の2の「勉強は好きですか」というところです。9年生の3年間の変化が著しく大きいのです。ここまで大きいには何か原因があるのか、追究したい感じがします。

ただ、資料6の「楽しく通っていますか」という項目で、「そう思う」、「だいたい思う」のところで9年生を見てみると、少しずつ上がっているように見えます。大泉桜学園が開校してから、もう9年間の効果が少しずつ出てきていて、低学年からのカーブがまっすぐに近づいてくる傾向になってくるのかなという感じもしないではありません。

委員

本校の在学数は1学年で100人切っていますから、ちょっとこの場では具体的には申し上げにくいのですが、なぜこの数値が低いのか、その原因については、校長として把握しています。教員もこの数値は重く受けとめていますが、数値だけを見て一喜一憂しているわけではなく、その原因を生徒個々に照らし合わせて探っています。十分対応できているかどうかはまた別の

問題ですが、そのように認識しています。

部会長

これに類した資料はまた出てくると思いますので、そのときにまたご議論いただければと思います。

事務局

学力調査にかかわる部分については、また次の機会にご意見をいただきたいと思っています。

4 事務連絡

(1) ねりま小中一貫教育フォーラムについて

事務局

(説明)

部会長

以上をもちまして、第8回練馬区小中一貫教育推進会議、小中一貫教育校検証部会を閉会いたします。ありがとうございました。

(閉会)